巻頭言

国粋ソフトウェアと国際ソフトウェア

石　田　晴　久†

ソフトウェアの国際的互換性の保持がだんだん難しくなってきた．理由は，ソフトウェアの一部のマイクロコード化，端末機や周辺機器のインテリジェント化，日米間の競争の激化などでもあるが，直接的には日本語処理機能である．大型機やオフコンはもとより，10万円台のパソコンでさえ，オプションの付加により，日本語ワープロ機能などが使用可能になり始めた．

コンピュータの日本語処理機能が充実することは，わが国の一般のユーザにとっては，望ましいことであり，コンピュータの大衆化や OA の普及にとって日本語化が不可欠であることはいうまでもない．しかし，今後，日本語処理機能が当り前ということになると，厄介な問題となるのは，外国（とくにアメリカ）製のソフトウェアがわが国にはそのまま通用しなくなることと，またわが国で国内用に作られたソフトウェアがそのままでは輸出できなくなるという事実である．このことは，わが国からみたソフトウェアは，国内向けのいわば国粋ソフトウェアと外国向けの国際ソフトウェアに分けざるをえないことを意味する．

日本語をある程度知っている外国人からは，すでに，「日本語は隠れたる関税外障壁だ．日本人は日本語を使うのを止めてもらいたい．」という声が出ている．確かに，外国製のソフトウェア・パッケージを日本で売ろうとすると，少なくともカナ文字（今後は漢字）が扱えるようにしなければならないし，マニュアルも英文のままでは余り売れない．シンガポールやオーストラリアとなぜ違うのか，とはよく聞く嘆きである．

そこで，われわれとして今後どうすべきかであるが，まず，日本語処理機能がわが国内で重要なことを外国メーカによく理解してもらうことと，英数コードと漢字コードの共存法をもっとよく研究することである．最近パソコンの代表的な OS である CP/M と MS-DOS に盛り込まれた漢字処理機能は，若干の問題はあるものの，その方向への努力の第一歩として評価したい．

次に国内用ソフトウェアの立場からいえば，今後はパソコンから大型機に至るまで，OS のレベルでカナ（ローマ字）漢字変換機能（もちろん ROM 化された漢字辞書つき）を備えて，すべてのメッセージを日本語で出せるようにし，また言語処理系などあらゆるソフトウェアで日本語テキストを扱えるようにすることが望まれる．漢字 ROM を内蔵するパソコンの BASIC から出てくるメッセージが英文というのはうなずけない．英文と和文のメッセージが切り換えられるソフトウェアの構成法，英文型ソフトウェアと和文型ソフトウェアとの相互翻訳法などはもっと研究されてよいテーマである．

さらに，和文の入力は今後はワープロのみならず，プログラム自体やデータの入力時にも必要となる．筆者自身は，和文の入力はローマ字によるのがよいと考えて，そのためのローマ字表記法を考案し実践中であるが，ローマ字入力論者の中からはローマ字入力に適した独創的なキーボードを考え出す人が現われ始めたのは心強い．カナ入力のためのオアシス型キーボードもわが国から生まれた注目すべき発明である．いずれにせよ漢字辞書の ROM 化と日本語入力法についても一層の研究が望まれる．

（昭和58年3月9日）

† 本会理事　東京大学大型計算機センター